

旧南洋群島における日本委任統治期の建築物の残存状況-2001～2003年の現地調査結果-

熊本県立大学環境共生学部

辻原 万規彦

1. 研究をはじめた経緯

筆者のもともとの専門分野は、建築学の分野の中でも、建築環境工学という分野である。最近のこの分野では、如何にエネルギーを使わずに、快適な環境を創り出すか、を研究することが重要な課題の一つである。そこで、学生時代を過ごした京都から、南に位置する熊本へ赴任した際に、次のようなことを考えた。

「暑熱地帯である南方地域の室内環境調整の工夫（住まい方の工夫）を現代に応用し、省エネルギー化を図れないだろうか？特に、戦前期の南方進出に伴う日本人の建築活動を扱えば参考になるのではないだろうか？」と。これには、戦前は電気を使った冷房などはない時代のことであり、なおかつ本来は南方に適応していない日本人が、生活の中から生み出した工夫が見つからないだろうか、と考えたことによる。

そこで、台湾や東南アジア、オセアニア帯を含むであろう南方地域の中でも、まずは、日本が委任統治しており、赤道にかなり近い旧南洋群島に注目して研究を始めた。しかし実際に、研究を始めてみると、旧南洋群島における日本委任統治期の建築物に関する調査や研究の蓄積が殆どないことがわかった。このような背景のもとに、「まずは、当時の建築物の残存状況を明らかにすることから始めて、建築活動全般を明らかにしたい」と考えて進めているのが本研究である。当初のきっかけとはかなり違った目的で研究を進めることになり、建築学の分野でも、建築史に関する研究となってしまった。

本稿では、2001年7月から2003年8月までの間に、5回に亘って行った現地調査での調査方法や調査結果を中心に述べることにする。

なお、本稿では、当時の用語はそのまま用いているが、旧仮名遣いについては現代仮名遣いに改めた。

2. 調査研究の方法

旧南洋群島における建築物の残存状況を明ら

かにし、できるかぎり詳細にかつ正確に記録を残すことを念頭に、以下のような3つの視点から、調査を進めている。なお、得られた成果は、できるだけ地元に戻元するよう努めている。

(1) 建築物の残存状況を調査し、地図上へプロットを行い、残存状況を示す地図を作成する。

実際には、次のような手順で調査を進める。

第0段階 地図を入手する。旧南洋群島については、正確な地図が入手にくく、島全体の地図を拡大して使用することが多い。

第1段階 車で対象地域を何度も回り、ビデオを回して記録しながら、メモをとる。特に、対象地区の全体像を把握することに注意する。

第2段階 帰国後、日本で、ビデオを確認して、地図を作成する。

第3段階 次回の訪問時に、修正を行う。できるだけ、これらの作業を繰り返す。

第3段階 最終的には、対象地区を全て歩いてチェックし、あわせて該当する建築物を写真などで記録する。

第4段階 最終的な地図を作成する。

(2) 残存している建築物の実測採寸を行い、図面を作成する。

実際には、次のような手順で調査を進める。

第0段階 最初の訪問時に、ビデオや写真で、対象建築物をできるだけ数多く撮影しておく（様々な方向から）。

第1段階 帰国後、日本で、ビデオや写真からおおまかな立面図をおこし、寸法線を入れておく。

第2段階 次回の訪問時に、現地で実測採寸を行う。許可が必要な場合もあるが、概して好意的である。

第3段階 帰国後、CADによるデジタルデータ化を行う。

(3) 主に日本国内に残る文献や写真資料など

を用いて、残存している建築物の設計者や施工年代などの詳細な情報を把握する。なお、当時の文献や写真資料は少なく、この作業は非常に難航している。

3. これまでの調査研究の概要

3. 1 2000 年度の調査概要

当初は、旧南洋群島だけでなく、東南アジアやオセアニア全体などの南方地域全体を対象として、「戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法」をテーマに研究を始めた。

2000 年度は、まず、概略をつかむために文献調査を行い、同時に研究の枠組みを示すために、研究報告として文献1) をまとめた。また、日本建築学会の会員名簿や人事総覧を用いて、旧南洋群島に関係する建築技術者を洗いだし、研究報告として文献2) をまとめた。

3. 2 2001 年度の調査概要

2001 年7月7日～29日に最初の現地調査を行った。この現地調査では、まずは、全体像を把握することを目的として、北マリアナ諸島サイパン島、パラオ共和国、ミクロネシア連邦ヤップ州、グアム、北マリアナ諸島テニアン島、北マリアナ諸島ロタ島、ミクロネシア連邦チューク州(トラック)、ミクロネシア連邦ポーンペイ州(ポナペ)を順に回った。初めての現地調査であったために、関係者へのアポイントから旅行自体の手配まで、準備にはかなりの労力が割かれることになった。

当初は、前述のように筆者にとっても新たな分野への挑戦であったために、調査の方向性が定まらなかった。しかし、ヤップを訪問した頃によく方向性が見え、建築物の残存状況を調査し、実測図面を作成する作業を開始した。その結果、ヤップ、テニアン、ロタならびにポーンペイでは、幾つかの建築物の実測調査を行うことができた。

また、品川白煉瓦(株)、日本郵船歴史資料館、アジア会館アジア・太平洋資料室、琉球大学附属図書館、沖縄県公文書館史料編集室などで聞き取り調査や文献収集を行った。南洋庁土木課技師であった山下弥三郎様のご息子にも聞き取り調査を行うことができた。

これらの調査結果を受けて、研究報告として、文献3)、文献4)、文献5) をまとめた。

3. 3 2002 年度の調査概要

2002 年4月1日～7日に、北マリアナ諸島サイパン島チャランカノア地区と北マリアナ諸島テニアン島サンホセ地区を対象として、第2次現地調査を行った。本格的な実測調査の開始であり、旧南洋興発社宅群などの実測調査、地図の作成、当時を知る人への聞き取り調査などを行った。

また、2002 年7月11日～28日には、パラオ共和国コロール地区とミクロネシア連邦ヤップ州を対象として、第3次現地調査を行った。パラオでは、旧南洋庁パラオ支庁(後の西部支庁)庁舎などのように比較的大規模な建築物の実測調査を行い、ヤップでは、コロニアの地図がほぼ完成した。

さらに、気象庁図書室や国会図書館、九州大学附属図書館などで文献収集し、再び山下様や当時を知る方への聞き取り調査を行った。

これらの調査結果を受けて、研究報告として、文献6)、文献7)、文献8)、文献9) をまとめた。さらに、文献10) を分担執筆した。

3. 4 2003 年度の調査概要

2003 年3月16日～23日に、北マリアナ諸島サイパン島チャランカノア地区、北マリアナ諸島テニアン島サンホセ地区ならびにロタ島ソンソン地区を対象として、第4次現地調査を行った。2002 年4月の調査に続いて、さらに幾つかの建築物の実測調査を行い、それぞれの地区の地図もほぼ完成した。

2003 年8月16日～28日に、パラオ共和国コロール地区を対象として、第5次現地調査を行った。2002 年7月の調査に続いて、さらに幾つかの建築物の実測調査を行った。また、建築物の残存状況を示す地図の作成に全力をあげたが、未完成に終わった。なお、この時に、現地の新聞に私たちの調査を紹介していただいた。

また、国会図書館などで文献収集し、国内の当時を知る方々への聞き取り調査も継続して行った。

さらに、月島機械(株)で、旧南洋興発の製糖工場などの図面を確認し、写しを入手した。これまで、旧南洋群島の建築物の図面はほとんど確認されていなかった。特に、大規模建築物に関しては、初めての確認である。

これらの調査結果を受けて、研究報告として文献11) を、学術講演梗概として文献12) をま

とめた。

4. 現地調査結果の詳細と検討^{注1)}

以下では、実測採寸調査を行った建築物を中心に、旧南洋群島に残る日本委任統治期の建築物の概要を述べる。また、幾つかの建築物については、あわせて現況の写真を示す^{注2)}。

4. 1 パラオでの現地調査結果

1) 旧南洋庁パラオ支庁（後に西部支庁）庁舎

RC造一部地下1階一部地上2階建ての旧南洋群島内でも比較的規模の大きな建築物である。昭和13年～14年頃の建設と推測される。また、設計者は山下弥三郎である可能性が高い。現在は、2階部分などを増築し、パラオ最高裁判所として使用されている。



写真1 パラオ最高裁判所（2002年7月）

2) 旧パラオ医院本館

RC造平屋建てである。昭和6年～7年頃に建設されたと推測される。設計者は不明だがトラック医院の設計者と同一人物と考えられる。当時の内部の様子はほとんどわからないものの、外科室のタイルの現存を確認した。現在は、パラオ・コミュニティ・カレッジのアドミニストレーションオフィスとして使用されている。



写真2 パラオ・コミュニティ・カレッジ（2002年7月）

3) 旧南洋庁観測所庁舎

RC造一部2階建てである。2階部分より西側は昭和4年7月に増築された。設計者は不明である。現在は、2階部分を大きく増築し、ベラウ国立博物館として使用されている。新博物館完成後、取り壊すとの情報もあったが、2004年8月現在は、増築部分を取り外して保存する方向とのことである^{注3)}。



写真3 ベラウ国立博物館（2002年7月）

4) 旧南洋庁气象台庁舎

RC造一部2階建てであるが、2階部分の大半は木造である。昭和13年7月以降に建設された。設計者は山下弥三郎の可能性が高い。現在は、戦時中に焼失したと言われる2階部分を建て直して、社会文化省芸術文化局などが入る庁舎として使用されている。



写真4 社会文化省芸術文化局（2002年7月）

5) 旧電信所発電室（?）

煉瓦造2階建てである。日本委任統治期の使用目的の詳細は不明であるが、現在のところ、電信所の発電室と推測している。昭和12年以前には存在が確認されている。設計者は不明である。現在は、原型を留めないほどに増築され、国会議事堂として使用されている。



写真5 国会議事堂（2003年8月）

6) 旧南洋拓殖の寮の基礎

コンクリート製である。実測調査後の2002年12月頃に撤去され、現存はしていない。詳細は不明であり、今後の検討課題である。



写真6 旧南洋拓殖の寮（2002年7月）

7) 旧夕日ヶ丘の官舎街の官舎の基礎

コンクリート製である。建設年代などの詳細は不明であり、今後の検討課題である。

8) 旧木工徒弟養成所の生徒寄宿舍の基礎

コンクリート製である。昭和5年頃、生徒の実習により建設されたと推測される。

9) 旧熱帯生物研究所の基礎

コンクリート製である。研究所内の建物配置などは不明なため、現存する基礎がどのような建物の基礎であるかも不明である。昭和10年3月以降に建設されたと推測される。

10) 南洋庁土木課技師山下弥三郎

山下は、大正13年に日本大学高等工学校建築学科を卒業後、南洋庁技手に採用され、昭和13年に技師に昇格した。山下の前任の建築系の技師は昭和5年までの在籍であり、昭和18年まで山下以外には建築系の技師はいなかった。したがって、山下は、技師昇格前から、建築行政や

設計などを主導していた可能性が高いと考えられ、この時期に建設された建築物については設計を行うか、少なくとも何らかの関与があったと考えられる。

4. 2 ヤップでの現地調査結果

1) 旧マキ公学校校舎の基礎

コンクリート製である。昭和2年2月に建設され、昭和6年度に増築された。群島内でも規模が大きい校舎である。以下の1)～3)までは、いずれも現在はジャングルの中に放置されたままである。



写真7 旧マキ公学校校舎（2001年7月）

2) 旧マキ公学校校長官舎の基礎

コンクリート製である。昭和2年に建設された可能性が高く、少なくとも昭和7年には存在が確認されている。

3) 旧マキ公学校教員官舎の基礎

コンクリート製である。昭和2年2月に建設された。2棟分の基礎の存在が確認されている

4) コロニアの旧一戸建官舎と旧二戸建官舎

RC造平屋建てである。大正15年～昭和3年頃の間には建設されたと推測される。大正14年の台風被害を受け、コロニアには多くのRC造の建築物が建設された。特に、RC造の官舎は、同時期の日本本土でも見られない可能性もあり、今後の調査が必要であるが、非常に貴重な例である可能性が高い。現在は、増築して住居として使用されているものもあるが、放置されたままの官舎もある。

5) ガチャパルの旧巡査駐在所の基礎

コンクリート製である。昭和14年4月以降に建設されたと推測される。アジア・太平洋資料室所蔵の「南洋庁巡査駐在所標準型設計図乙号型」（審査山下（弥三郎）、設計製図仲摩、昭和

14年4月)の平面図を線対称に変更したものである。



写真8 旧ガチャパル巡査駐在所(2001年7月)

4.3 サイパンでの現地調査結果

1) 旧南洋興発常務社宅

RC造平屋建てである。大正14年～昭和7年の間に建設されたと推測される。設計者などの詳細は不明である。旧南洋興発の社史とも言える『南洋興発株式会社 興発記念砂糖になるまで』(昭和7年発行)に写真が掲載されている。現在は、住居として使用されている。



写真9 旧南洋興発常務社宅(2001年7月)

2) 旧南洋興発高級社宅

一部RC造一部木造平屋建てである。建設年代などの詳細は不明である。現在は、一部を住居として使用している。

3) 旧南洋興発二戸建社宅と四戸建社宅

壁式RC造平屋建てである。建設年代などは不明である。壁式とは言え、RC造の社宅は、同時期の日本本土でも見られない可能性もある。現在は、住居として使用しているものもある。

4) 旧南洋興発サイパン製糖所発電室(?)

RC造2階建てである。建設年代や設計者などは不明であるが、月島機械(株)所蔵の旧南洋

興発ポナペ酒精工場の発電室の図面に酷似している。現在は、マウント・カーメル高校の倉庫として使用されている。



写真10 旧南洋興発二戸建社宅(2001年7月)



写真11 マウント・カーメル高校倉庫(2001年7月)

5) 旧教員官舎

木造平屋建てである。建設年代などの詳細は不明であるが、日本委任統治期の木造建築の数少ない現存例である。



写真12 旧教員官舎(2001年7月)

6) 旧南洋興発サイパン本社屋の一部(?)

RC造平屋建てである。サイパン本社屋である

との裏付け資料は未見であり、建設年代や設計者などの詳細も不明である。現在はマイクロネシアン・リーガル・サービスのオフィスとして使用されている。



写真 13 マイクロネシアン・リーガル・サービス (2001年7月)

7) 旧南洋興発サイパン製糖所附属医院関連の建築物(?)

RC造平屋建てである。建設年代や当時の用途などの詳細は不明である。合計3棟の現存が確認され、現在は、そのうち2棟は倉庫として、1棟は市議会議場として使用されている。

4. 4 テニアンでの現地調査結果

1) 旧南洋興発テニアン製糖所工場事務所

RC造平屋建てである。昭和9年12月以降に建設された。設計者などの詳細は不明である。現在は、放置されたままである。



写真 14 旧南洋興発テニアン製糖所工場事務所 (2003年3月)

2) 旧南洋興発テニアン製糖所糖度分析所

RC造2階建てである。昭和8年6月頃～9年7月頃に建設されたと推測される。パイナップルをモチーフとした装飾が特徴的であるが、設計者などの詳細は不明である。現在は、放置され

たままである。

3) 旧南洋興発テニアン製糖所社長社宅

一部RC造一部木造平屋建てである。現在は、住居として使用されている。



写真 15 旧南洋興発テニアン製糖所糖度分析所 (2003年3月)



写真 16 旧南洋興発テニアン製糖所社長社宅 (2002年4月)

4) 旧テニアン町消防組と警防団

昭和7年9月以降に建設されたと推測されるが、詳細は不明である。現在は、放置されたままである。



写真 17 旧テニアン町消防組 (2001年7月)



写真 18 旧テニアン町警防団 (2003 年 3 月)



写真 20 旧南洋興発ロタ製糖所汽罐室と煙道
(2003 年 3 月)

5) 旧テニアン小学校校舎

RC 造平屋建てである。昭和 6 年 6 月に建設されたが、それ以上の詳細は不明である。現在は、放置されたままである。



写真 19 旧テニアン小学校校舎 (2002 年 4 月)



写真 21 旧南洋興発ロタ製糖所附属医院 (2003 年 3 月)

4. 5 ロタでの現地調査結果

1) 旧南洋興発ロタ製糖所汽罐室と煙道

昭和 10 年 12 月に竣工した。煉瓦造であり、そのうち耐火煉瓦は品川白煉瓦製であると確認された。工事中の写真 (『具志川市史編集資料 13』所収) と図面の一部 (月島機械所 (株) 所蔵) を確認している。現在は、小さな看板があるものの野ざらしのままである。

2) 旧南洋興発ロタ製糖所附属医院

RC 造平屋建てである。建設年代、設計者ならびに内部の様子などの詳細は不明である。現在は、ロタ高校の校内に放置されたままである。

5. まとめ

旧南洋群島の日本委任統治期の建築活動を明らかにすることを目的として、主として旧南洋群島の西側の地域を対象として、建築物の残存状況を把握するために行った 5 次に亘る現地調

査の結果をまとめた。

2004 年 8 月にも、パラオ共和国コロール地区を対象として、第 6 次現地調査を行ったが、今後は、インターネットなどを利用して、これまでの調査・研究成果を公開していきたいと考えている。

特に建築物の場合は、一度取り壊すと復元するには大きな困難を伴う。また、厳しい気候の中で、長年放置された建築物の劣化は激しい。一方で、このようなある種の文化遺産を修復し、保存するための現地のスタッフの数は少ない。如何に記録し、修復し、保存していくのかは、今後の大きな課題である。

付記

本稿は、太平洋学会第 13 回研究発表会 (2004 年 5 月 22 日、日本大学法学部本館) での発表内容に加筆・修正したものである。

また、辻原の担当する研究室のホームページは以下の通りであり、このホームページから文献 1) ~9)、

11) ~12) がダウンロードできる。

<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~m-tsuji/>

謝辞

本稿の一部は、平成12年度熊本県立大学地域貢献研究事業(学術高度化研究)、平成13・14年度科学研究費補助金(奨励研究(A)、若手研究(B)、課題番号13750557)、平成13年度(第39回)三島海雲記念財団学術奨励金(受付番号75)、平成16年度科学研究費補助金(若手研究(B)、課題番号16760520)に依った。記して謝意を表す。

現地調査の際には次の方々にお世話になった。

在日本パラオ大使館の皆様。パラオ最高裁判所の皆様。パラオ・コミュニティ・カレッジのPatrick Ubal Tellei 学長とJay Olegerill 氏(現副学長)。パラウ国立博物館のFaustuna K. Rehuher 館長。社会文化省芸術文化局の皆様。上院事務局と下院事務局の皆様。オーシャンニック・ワイルドライフ・ソサエティの倉田洋二副会長。在パラオ日本大使館の小川和美専門調査員、三田貴専門調査員。ヤップ高校の大橋旦先生。北マリアナ諸島政府社会文化省歴史保存局副歴史保存官のLon Bulgrin 氏、同テニアン駐在のCarmen A. Sanchez 氏、同ロタ駐在のEloy M. Ayuyu 氏ほか歴史保存局のスタッフの皆様。ほか、関係者の皆様。

また、資料の収集にあたっては財団法人アジア会館アジア・太平洋資料室の山口洋児室長、戦没した船と海員の資料館の上澤祥昭様、山下三長氏に、情報収集にあたっては太平洋学会の中島洋専務理事にご協力頂いた。

記して謝意を表したい。

脚注

- 1) それぞれの建築物の実測図面や推定の根拠などの詳細は、文献1)~12)を参照。本稿では、スペースの関係上、推定の根拠となる文献や資料を明示していない。
- 2) 写真の撮影は、全て筆者による。また、キャプション中の()内は、撮影年月である。
- 3) パラウ国立博物館のFaustuna K. Rehuher 館長と筆者とのやり取りによる。

参考・引用文献

- 1) 八幡真樹子, 辻原万規彦, 平川真由美:「南方建築」に用いられた室内環境調整手法-戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その1-, 日本建築学会九州支部研究報告, 第40号・2〔環境系〕, pp.129~132, 2001.3.
- 2) 矢野詩史, 辻原万規彦, 平川真由美: 南洋群島における建築組織について-戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その2-, 日本建築学会九州支部研究報告, 第40号・3〔計画系〕, pp.633~636, 2001.3.

- 3) 辻原万規彦, 香山梢, 今村仁美, 平川真由美: ヤップ島に現存する日本委任統治時代の建築物(1)-戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その3-, 日本建築学会九州支部研究報告, 第41号・3〔計画系〕, pp.413~416, 2002.
- 4) 香山梢, 辻原万規彦, 今村仁美, 平川真由美: 南洋群島における建築物の床下の構造について-戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その4-, 日本建築学会九州支部研究報告, 第41号・3〔計画系〕, pp.417~420, 2002.3.
- 5) 辻原万規彦, 香山梢, 今村仁美, 平川真由美: 旧南洋群島への建築技術の伝播(1)-戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その5-, 日本建築学会九州支部研究報告, 第41号・3〔計画系〕, pp.421~424, 2002.3.
- 6) 辻原万規彦, 今村仁美, 香川治美: サイパン・チャランカノア地区に残る日本委任統治時代の建築物(1)-戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その6-, 日本建築学会関東支部研究報告集II, 第73号, pp.453~456, 2003.3.
- 7) 辻原万規彦, 今村仁美, 香川治美: テニアン・サンホセ地区に残る日本委任統治時代の建築物(1)-戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その7-, 日本建築学会関東支部研究報告集II, 第73号, pp.457~460, 2003.3.
- 8) 辻原万規彦, 今村仁美, 香川治美: パラオ・コロールにおける日本委任統治時代の建築物の残存状況と旧パラオ支庁庁舎-戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その8-, 日本建築学会九州支部研究報告, 第42号・3〔計画系〕, pp.609~612, 2003.3.
- 9) 辻原万規彦, 今村仁美, 香川治美: 旧パラオ医院本館と旧南洋庁観測所および気象台庁舎について-戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その9-, 日本建築学会九州支部研究報告, 第42号・3〔計画系〕, pp.613~616, 2003.3.
- 10) 辻原万規彦: パラオに残る日本委任統治時代の建築物, パラオ共和国-過去と現在そして21世紀へ-(須藤健一監修, 倉田洋二・稲本博編), おりじん書房, pp.208~223, 2003.4.
- 11) 辻原万規彦, 今村仁美: ロタ・ソンソン地区に残る日本委任統治時代の建築物-戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その10-, 日本建築学会九州支部研究報告, 第43号・3〔計画系〕, pp.585~588, 2004.3.
- 12) 辻原万規彦, 今村仁美: パラオ・コロールにおける日本委任統治期建築物の現存状況, 日本建築学会大会(北海道)学術講演梗概集, F-2, pp.413~414, 2004.8.